
指先から伝わる

朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

指先から伝わる

【Nコード】

N 6 1 4 2 C

【作者名】

朱

【あらすじ】

同級生で、部活仲間の功が好きなユカリ。ユカリにだけ引越しのことを伝える功。中学生の、甘く切ない恋。

あなたの隣はあたしであればいいと、何度願ったことが。

あなたの1番はあたしであればいいと、何度想ったことが。

【指先から伝わる】

中学三年の夏、あたしは切ない切ない恋をした。

『告っちゃえばいいのに』

マナミはあたしの唯一の親友だ。二年のときのクラス替えで会って、すぐ仲良くなった。喧嘩だってもちろんしたけど、どっかの誰かがいったように喧嘩するほど仲が良かった。マナミには彼氏がいて、紹介してもらったけど、すごくかっこよくて、優しくて。でも少し背が小さいかった。本人もそれが悩みだと言っていた。

『ユカリはさ、積極性がないんだよ！あたしいつも思ってたあ』

『、、、そうかなあ』

『そうだよ、絶対！』

今まで恋愛は何回かしてきた。もう中学三年だし、まだ恋をしてないってことはなかった。それでもマナミが言うように、あたしは積極性がないのかもしれない。前好きで付き合った人には、『一緒にいてもつまないから』とキツパリ言われて別れた。別にキスとか恋人らしいことがしたくないんじゃないやなかった。ただ、相手がそういうことしか頭にないのかな、と思うと怖くなって。

そんななか、あたしが好きになったのは同じ部活の同級生だった。て言っても、三年はもう引退したんだけど。

かつこいいとは掛け離れていて、どっちかっていうと童顔のかわいい系だ。

そんな功^{コウ}があたしは大好きで、部活では付き合ってるのか？って聞かれるくらい仲が良かった。楽しかった。

それなのに、

『俺、引つ越すから』

突然だった。

もちろんあたしはそんなことこれっぽっちも知らなくて、訳が解らなくなつてそこから逃げ出した。

ただ、功があたしの前から、日常から消えるなんて、考えたくなく

て、、

『ユカリ』

『、、功』

引っ越すから、と告げられたのは一週間前。それから一言も言葉をかわしていない。

『、、何？そんな顔して』

功は少し下を向いていて、女の子のような長い睫毛は伏せられていた。

嫌な予感が、した

『明後日、行くんだ』

ああ、やっぱり

あたしの勘は、当たってほしくないときにだけ当たるんだ。

『――そっか、わかった』

出来る限り、明るい声で。

教室からでていく功の背中を見つめて。その時、あたしはこの気持ち
ちは閉まっておこうと心にきめたんだ。

だって、もし功があたしを好きでいてくれたとしても、遠距離なん
て不安過ぎるから。

『告らないよ、閉まっておくの』

『、、、、そっかあ』

マナミは残念そうに、それでいて優しい目でそういった。こんなに、
表情だけで心が温かくしてくれる友達はなかなかいない。

功があたしの側から居なくなるまで、あと一日。

明日から、功はあたしを見てくれなくなる。

先生は功が引つ越すまで

クラスの皆に言うつもりはないらしい。きっと功が頼んだんだ。

功は、そういう人だから

この日功とは一言も喋らなかった。目だって合わせれなかった。

そして功がいなくなる日

『ユカリ、』

学校へ入った所で功に声を掛けられた。やっぱり目を伏せていて。

『、、、何？』

『あのさ、今日学校終わったら、見送り来てくれないか？』

少しひかえめに功は言った。

断れるわけ、ないのに。

『当たり前でしょ！』

ぽんっ、とあたしより少しだけ高い位置にある頭に手を乗せて、わしゃわしゃと撫でる。

『うわっ！何すんだよ！』

少し抵抗したけど、やっぱり功は優しく、あたしの乱暴な撫で方を受け入れてくれた。

さよなら、あたしの恋心。

あんまりどころか、全く授業には集中できなくて。
あっという間に見送りの時間の30分前だった。

何着て行こう。
いつそのこと制服で行こうか。

そんなこと考えながらオレンジのロゴ入りキャミと、ショールパンに着替えて家を出た。

特に何も考えないで歩いて、家から歩いて三分くらいのバス停が見えてきた。

あ、功、、、荷物多いな。

本当に行っちゃうんだ、

『、、、ユカリ』

『、、、やほ。お母さん達は?』

『先に行ってる』

『そっか、、、』

『、、、なあユカリ。楽しかったよな、今まで。部活も、クラスも』

、、、やめて、そんなこと言わないで。過去にしないで。

『すっげー楽しかった!!』

人生で、きつと1番だ!!」

突然大きな声で、功は青空をみていった。

『、、、絶対忘れない』

視界が、歪む

『うん、忘れないで』

功と目が合う。

同時にあたしの目から雫が流れ落ちる。

『何泣いてんだよ』

功は優しく苦笑して、

あたしの頭を撫でながら、手を握ってくれた

指先から功の体温が伝わってくる

『、、、っ功』

『、、、ん？』

『、、、ずっと好きだった』

閉まっておこうと、決めたのに。絶対に言わないと、決めたのに。

『、、、うん、俺も』

『、、、功、会えるよね、また』

『当たり前』

『、、、あは、断言？』

繋いだ手から功の暖かさが注がれる気がして、涙が止まらなかった。

『あ、バス、、、』

功の言葉と同時に曲がり道のかげからバスが見えた

『じゃあ、行くな』

『、、、、ばいばい、功』

功は何も言わずに荷物を持って、帽子を深く被った。

指がするりと離れる

バスがあたし達の隣に止まって、ドアが音を立てて開いた。

功はあたしの手になにか握らせて、耳元に顔を寄せて、

『好きだ』

1番聞きたかった言葉。

あなたのくちから、一度でもいいからと。ずっと求めていた言葉。

『あたしも、、だいすき』

あたしの声はバスの発進音に掻き消されて、功の耳に届いたかさえ解らない。

『またね！功！』

バスの1番後ろの窓から功はあたしに手をふった。

くしゃり、とあたしの手の中で小さな紙切れが鳴った。

あたしはその紙切れをみて、涙じゃなくて笑顔を漏らした。

『、、、ずっと待ってる』

『高校卒業したら、会いに行くから。
それまで待っててな』

中学三年の夏、あたしは切ない切ない恋をした。

中学三年の夏、あたしはあなたの為に一生分の恋をした。

ありがとう、だいすきだよ

指先から伝わる、あなたの温もりが

あたしは何よりも好きでした。

【指先から伝わる】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6142c/>

指先から伝わる

2010年10月17日23時36分発行